

古英語の *se þe* 関係節における格付与

内田脩平

1. 導入

(1) に示すように、古英語期の関係節は、指示詞の関係代名詞 *se* と不変化詞 *þe* からなる複合関係詞によって導かれることが可能であった。このタイプの関係節を *se þe* 関係節と呼ぶ。(1) の例では指示詞の関係代名詞 *þa* は先行詞と数、性に関して一致し、関係節内の文法関係で屈折している。ここでは関係節の主語が空所であるため、主格で屈折している。*se þe* 関係節では指示詞の関係代名詞の格は、(1) のように関係節内の文法関係で決まるのが原則である。

- (1) Palladius biscop wæs ærest sended to Scottum *þa þe* on
 Palladius bishop was first sent to Scots who that in
 Crist gelyfdon
 Christ believed
 ‘Bishop Palladius was first sent to the Scots, who believed in Christ’

(Bede 46.30/ 宇賀治 (2000: 246))

しかし、(2) に示すように、関係代名詞の格が関係節内の文法関係を無視し、先行詞の格と一致する場合が存在した。

- (2) ge seceað þone hælynd **þone** þe on rode ahagen wæs;
 you seeks the Jesus who that on rood crucified was
 ‘You seek Jesus, who was crucified on the rood’

(Matt. (WS) 28.5/ 宇賀治 (2000: 245))

(2) の例では関係節には主語の空所があり、関係代名詞には主格が要求される

が、太字で示される関係代名詞は主格ではなく対格で標示されている。先行詞である *þone hælynd* の格と一致しているが、このような現象は Case Attraction と呼ばれる。

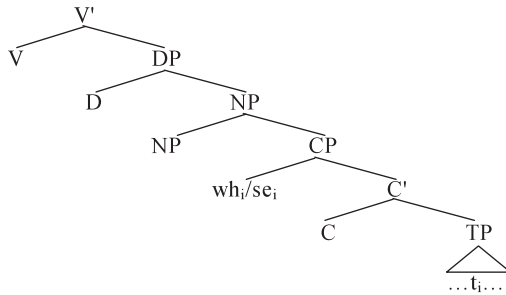
本稿では古英語期の Case Attraction の現象に統語的な説明を与えるとともに、Case Attraction が限られた環境でしか生起できなかった理由を説明することを目的とする。2節では関係節の主要な分析を概観し、先行研究の下での Case Attraction の派生を考察する。3節は歴史コーパスから得られたデータを提示し、Case Attraction が非制限用法の関係節の現象であることを明らかにする。4節では3節で得られたデータを基に、非制限用法の関係節における Case Attraction の分析を提示する。5節は結論である。

2. 関係節の先行研究

本節では関係節の主要な分析の3つを概観し、先行研究の下で Case Attraction が説明されるか否か検討する。実際の分析に移る前に、関係代名詞の格付与に関する前提として、Case Attraction が起こる場合、関係代名詞の格は先行詞と一致するため、先行詞が格付与を受ける母型節の要素から関係代名詞も格付与されていると仮定する。

生成文法の歴史において、wh 移動分析、繰り上げ分析、照合分析が関係節の主要な分析として提案されている。ここではそれぞれの分析に沿って Case Attraction の派生を考察する。(3) は Chomsky (1977, 1981) や Browning (1987) で提案されている wh 移動分析の下での派生の概略を示している。

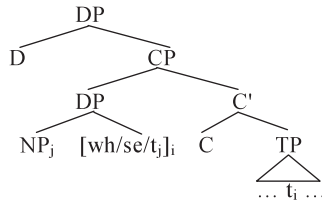
(3) wh 移動分析



この分析の下では主要部名詞句は関係節の外側に生起し、関係節 CP が先行詞名詞句に付加されており、関係節内で wh 句、または空演算子が CP 指定部まで移動すると仮定されている。古英語期では指示詞の関係代名詞 *se* が現代英語の wh 句に相当する。¹しかし、Bianchi (1999) は wh 移動分析では Case Attraction を説明することができないと指摘している。格付与が統率の下で行われるとすると、(3) において V は NP を統率することができるが、NP に付加されている関係節 CP は NP の分節の 1 つにしか支配されていないため、CP は V に統率されず、V は CP 指定部にある要素に格付与することができない。仮に格付与が索性の一致操作の下で行われるとしても同様の問題が生じる。Chomsky (2000, 2001) の枠組みに従えば、一致操作には C 統御関係が必要であるが、(3) において V は母型節の要素は NP に付加された関係節 CP、およびその内部の要素を C 統御することができない。したがって、wh 移動分析では Case Attraction に説明が与えられない。

次に、繰り上げ分析を用いた Case Attraction の分析を考察する。Bianchi (1999) は Case Attraction の事例を関係節の繰り上げ分析を支持する証拠として挙げている。(4) は Kayne (1994) や Bianchi (1999) に基づく繰り上げ分析の派生の概略を示している。

(4) 繰り上げ分析

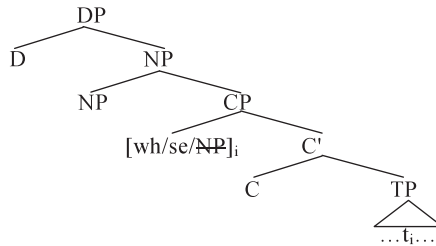


この分析ではwh句と主要部名詞句は関係節内に生成され、CP指定部まで繰り上がる。主要部名詞句はCP指定部のDP内で更に繰り上がる。ここでは関係節はDの補部であるため、母型節の要素からC統御されるため、母型節の要素から格付与されることが可能となる。しかし、繰り上げ分析の下でCase Attractionを派生する場合、別の問題が生じる。Borsley (1997)などで指摘されているように、繰り上げ分析では主要部名詞句が関係節内の元位置と移動先の両方で格付与されることになってしまう。Case Attractionにおいて指示詞の関係代名詞が母型節の要素から格付与されているとすれば、関係節内の元位置での格付与と移動先での格付与が行われることになるが、それに加えCase Attractionが義務的に生じると予測してしまう。しかし、実際には(1)のようにCase Attractionが起こらない場合があるため、事実を正しく捉えることができない。

最後に、Chomsky (1965)で提案され、Sauerland (2003)などで発展された照合分析を用いてCase Attractionの派生を考察する。(5)に概略の構造を示す。照合分析の下では関係節内でwh句と主要部名詞句がCP指定部に移動し、移動した主要部名詞句は関係節の外にある主要部名詞句との同一性の下で削除される。この分析の下でCase Attractionを派生しようとする、上記2つの分析と同様、CP指定部への格付与に関して問題が残る。つまり、もし関係節CPがNPに付加されているのであれば、母型節からCP指定部にある要素への格付与が不可能であり、(3)のwh移動分析と同じ問題に直面する。また、仮に関係節CPがNの補部であるとする、(4)の繰り上げ分析と同様に、CP指定部の

要素が2回格付与されてしまうという問題が生じる。

(5) 照合分析



3. データ

本節では歴史コーパスから得られたデータを基に、Case Attractionは非制限的關係節の現象であることを示す。

3.1. Case Attraction の生起数

上述したように、Case Attraction 自体は義務的な現象ではない。確実に Case Attraction の事例であると判断するために、(6) の条件を採用する。

(6) Case Attraction の条件

- i. 関係代名詞の格が先行詞と一致している、かつ
- ii. 関係節内の空所で付与される格が関係代名詞の格と異なる。

1つ目に、関係代名詞の格が先行詞の格と一致していることが当然必要である。加えて、その関係代名詞の格は関係節内の要求とは異なる格である必要がある。逆に言えば、先行詞の格と関係節内で要求される格が同じである場合、Case Attraction が起こっているか否かは判断できない。例えば、(7) の例では先行詞 *Lazaru* の格と関係節内で要求される格はともに対格であるため、対格で屈折している関係代名詞 *þone* は関係節内の文法関係で決まっているのか、先行詞の格と一致しているか、つまり Case Attraction が起こっているのかは判断できない。したがって、このような例は調査からは除外される。

- (7) & woldan geseon Lazarus **þone** þe he ær of deaþe
 and would see Lazrus who that he early of death
 awehte
 raised up
 ‘and would see Larzus whom he early awaked from death’
 (coblick,HomS_21_[BIHom_6]:69.61.855/O2)

表1ではThe York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)とThe Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2)から得られたCase Attractionの時代ごとの生起数を示している。Case Attractionが可能なse þe 関係節は古英語の最初期から、中英語の初期まで見られるが、Case Attractionは古英語期にのみ観察される。

表1 Case Attractionの生起数²

	O1	O2	O3	O4	M1	M2	total
CA	0	33	19	1	0	0	53
se þe Rel	3	822	920	109	14	0	1868

具体例の一部を(8) - (10)に示す。(8)では関係節内は主語が空所になっているが、関係代名詞は先行詞に一致し対格を付与されている。(9)では関係節内の空所は主語で、関係代名詞は与格となっている。(10)は関係節内の前置詞の補部が空所となっており、関係代名詞が主格を持つ例である。いずれの例でも関係節内の空所に求められる格とは異なる格を関係代名詞が示しており、その格は先行詞の格と一致している。

- (8) 先行詞：対格，関係節：主格

þa bædon Theodorum **þone** þe þa wæs ærcebiscop
 they prayed Theodore whom that then was archbishop
 ‘they prayed Theodore who was the archbishop’

(cobede,Bede_3:5.170.31.1679/O2)

(9) 先行詞：与格, 関係節：主格

we sceolon eft agifan ure sawla urum scyppende, þam
 we shall again give back our soul our creator who
 ðe hi ær gesceop
 that them before scrape
 ‘we shall again give back our soul to our creator, who scrape them’

(colwgeat,ÆLet_6_[Wulfgeat]:289.123/O3)

(10) 先行詞：主格, 関係節：与格

si he ofslegen, se þe þu hit mid fynde.
 be he killed who that you it with find
 ‘he be killed with whom you find it’ (cootest,Gen:44.9.1881/O3)

3.2. 非制限的振る舞い

本節では Case Attraction を起こしている関係節の環境に焦点を当て、それが非制限的關係節の環境に生じていると主張する。関係節が制限節か非制限節かを区別する基準を (11a-e) に示している。(11a-d) の基準は中尾 (1972) や岩田 (2012) で採用されているものである。

- (11) a. 先行詞の前の決定詞
 all, every, no, any, first, last …… 制限節
 his, John’s など属格名詞句 …… 非制限節
- b. 先行詞
 一般的なもの …… 制限節
 固有名詞など特定のもの …… 非制限節
- c. 関係詞
 ゼロ関係節 …… 制限節
 the which …… 非制限節
- d. 関係詞節内の要素
 話題の推移を示す文副詞が生じる時 …… 非制限節
 (cf. 中尾 (1972: 193), 岩田 (2012: 63))
- e. コンマの有無

(11a) は先行詞の前の決定詞の種類について、属格代名詞が決定詞として用いられる場合、非制限節であると判断される。(11b) は先行詞の特徴として、固

有名詞などの特定の表現は非制限節を導く。(11c)の関係詞の区分については、今回の調査では該当はする例はない。中尾によると、(11d)の関係節内に生じる話題の推移を示す文副詞はshortly to sayなどであり、そのような副詞を伴う関係節は非制限節であると判断される。(11e)におけるコンマやイントネーションの区分について、中尾や岩田は初期英語における制限・非制限の区別の基準として使うことができないとしているが、今回の調査では(11a-d)のいずれの基準にも該当しない例に関して、コンマの有無に基づき制限・非制限を区別する。以上の議論を踏まえ、表2はCase Attractionにおける非制限用法の分布を示している。表1で示したCase Attractionの総数53例のうち、51例は非制限節の例であると判断されるため、Case Attractionは原則として非制限節の環境で生じることが分かる。³

表2 Case Attractionにおける非制限用法

	O2	O3	O4	合計
a.	12	6	1	19
b.	11	8	0	18
c.	-	-	-	-
d.	0	0	0	0
e.	9	4	0	14
合計	32	18	1	51

それぞれの具体例の一部を(12a-c)に示す。(12a)は先行詞が属格名詞句により修飾されている例、(12b)は先行詞が固有名詞である例、(12c)は関係節がコンマによって区切られている例である。

(12) a. 属格名詞句

Heo ða læddon hine ealle sona swiðe ær on morgene
 They then took him all soon very early in morning
 to Pilates domerne, þæs þe Iudea gerefa wæs
 to Pilate's court whose that Judea's prefect was
 'All they then took him quickly very early in the morning to
 Pilate's court which was Judea's prefect'

(coverhomE,HomS_24.1_[Scragg]: 207.179/O3)

b. 固有名詞

þa bādon Theodorum þone þe þa wæs ærcebiscop
 they prayed Theodore whom that then was archbishop
 ‘they prayed Theodore, who was the archbishop’

(cobede, Bede_3:5.170.31.1679/O2)

c. コンマによる区分⁴

and hu hold he is mancynne, þam þe leahtras
 and how faithful he is mankind, whom that sin
 forseoð
 scorn

‘and how faithful he to mankind, to those who scorn sin’

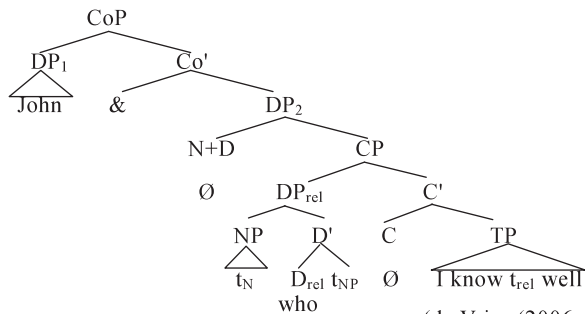
(coaelhom, ÆHom_22:506.3609/O3/Frankis (2016: 176))

4. 提案

前節の観察に基づき、本節では古英語における Case Attraction の派生を提案する。以下では、先行詞と関係代名詞を含む DP が等位接続されているとする、De Vries (2006) における非制限関係節の分析を部分的に採用し、古英語の非制限関係節における関係代名詞は関係節内から移動するのではなく、先行詞と等位接続されている構造を提案する。そして、提案する構造により、Case Attraction 自体の随意性も説明することができると主張する。

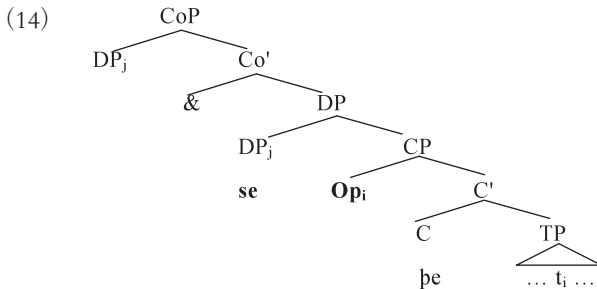
(13) a. John, who I know well

b.



まず、De Vries の提案する非制限関係節の派生を以下の (13) に示す。(13) では非制限関係節は空の主要部を持つ DP を含んでおり、それが先行詞と等位接続されている。彼は関係節の繰り上げ分析を仮定しており、関係節内で DPrel が CP 指定部に移動する。その後 DPrel 内において NP が DP 指定部に移動し、さらにその主要部 N が関係節 CP を補部に持つ D へと移動する。このようにして形成された N+D の複合体を主要部とする DP が先行詞と等位接続されている。また、Coordination P の主要部も空のスペルアウトを与えられると仮定されている。以上の分析を部分的に採用し、本稿でも古英語の非制限的關係節において先行詞と等位接続された DP が存在し、関係節 CP はその DP に付加されていると仮定する。そして、指示詞がその DP の位置に生じることによって Case Attraction が派生されると主張する。

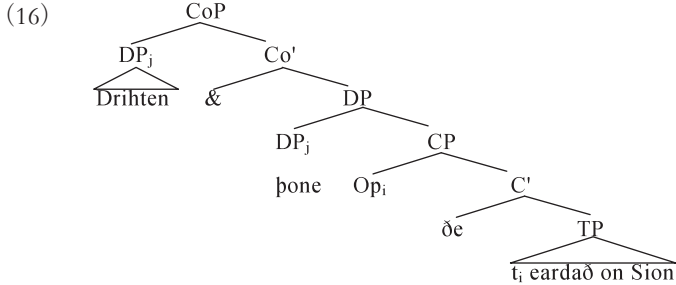
本稿の提案する Case Attraction の構造を (14) に示す。



2節で見たように、繰り上げ分析では格が二回付与されるという問題が生じるため、De Vries の構造とは異なり、本稿では関係節 CP は DP に付加されていると仮定する。(14) では関係節内で空演算子が CP 指定部に移動する。先行詞と等位接続される DP の位置には空の要素ではなく、古英語では指示詞が入ると仮定する。先行詞と等位接続された DP は母型節内の要素から先行詞と同じ格を受けるため、Case Attraction が起き、関係節内の文法関係とは異なる格を付与される。具体例として (15) を用いて派生を考察する。(15) では関係節は主語の空所を含む一方で、関係代名詞は先行詞と一致した対格を持つ Case Attraction を示す。

- (15) heriað forði Drihten þone ðe eardað on Sion
 praise therefore Lord whom that lives in Zion
 ‘Praise therefore the Lord, who lives in Zion.’

(Fragments of Psalms 9.11/Traugott (1992: 225))



その構造である (16) において、先行詞 *Drihten* と関係代名詞の指示詞は等位接続され、両者は母型節の動詞から同じ対格を付与される。等位接続された要素が同じ格を付与されることは自明である。関係節 CP は指示詞の DP に付加し、関係節内では空演算子が CP の指定部に移動する。このような派生により、先行詞と同じ格を持つ指示詞の関係詞を伴う Case Attraction が派生される。

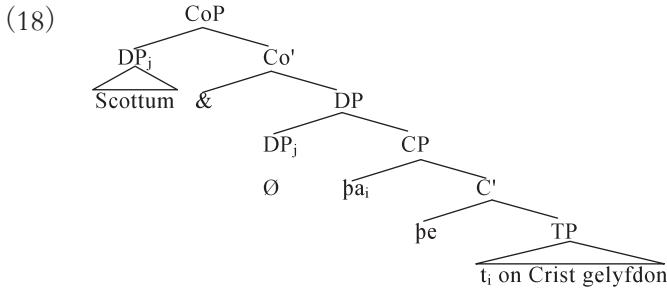
同じ構造に基づき Case Attraction の随意性も説明可能である。(15) と同じ非制限節の環境でも Case Attraction は義務的ではない。(17) では先行詞が固有名詞であるため非制限節の環境である。関係節内に主語の空所があり、先行詞は与格であるが、指示詞の関係代名詞は主格の屈折を持つため、Case Attraction が起こっていない。

- (17) Palladius biscop was arest sende to Scottum þa þe on
 Palladius bishop was first sent to Scots who that in
 Crist gelyfdon
 Christ believed
 ‘Bishop Palladius was first sent to the Scots, who believed in Christ’

(Bede 46.30/ 宇賀治 (2000: 246))

(17) の構造は (18) のようになる。(16) では指示詞が占めていた、先行詞と

等位接続されたDPの位置は、(18)では空のDPが占めており、関係節はこの空のDPに付加されている。関係節内では、指示詞の関係代名詞がCP指定部に移動する。この場合、関係代名詞の格付与は関係節内で行われるため、関係節内で要求される主格を持つことになる。関係節CPはDPに付加されているため、母型節の要素から格付与が行われることはない(2節参照)。



(16)のように指示詞が先行詞と等位接続されるDPを占める場合と、(18)のように空のDPが占める両方の構造が利用可能であった。したがって、非制限節の環境でも Case Attractionが随意的であったことが説明される。⁵

5. 結語

本稿では古英語期の *se þe* 関係節における Case Attraction と呼ばれる現象に統語的な説明を与えた。Case Attractionが生じる環境は原則として、非制限節であることをコーパス調査により明らかにした。Case Attractionが起きている場合、関係代名詞の指示詞はCP指定部ではなく、先行詞と等位接続されるDPの位置を占めるため、先行詞と同じ格を母型節の要素から付与されると主張した。そして、そのDPの位置を空の要素が占め、指示詞の関係代名詞が関係節内で移動する構造も可能であったため、Case Attractionの随意性が説明されると主張した。

注

* 本稿は日本英文学会第91回大会（2019年5月25日、於安田女子大学）で口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。論文にまとめるにあたって大室剛志先生、田中智之先生、柳朋宏先生には貴重なご助言を頂いた。また、編集員の先生方に貴重なご意見を頂いた。記して感謝の意を表したい。

¹ 指示詞の関係代名詞が *wh* 関係詞と同じ位置を占めることは、(i) に示すように、指示詞の関係代名詞が前置詞の随伴を許すこと、および *se þe* 関係節において指示詞の関係代名詞が補文標識である不変化詞 *þe* に先行することから支持される。

(i) *Weorðian we eac ða claðas his hades, of ðam wæs
Honor we also the clothes his person by which was
ure gekind geeneowod
our race renewed*

‘let us also honor the clothes of his person, by which our race was renewed’

(Blickling p. 11.9/Allen (1980: 83))

² YCOE, PPCME2の時代区分はO1 (-850), O2 (850-950), O3 (950-1050), O4 (1050-1150), M1 (1150-1250), M2 (1250-1350) である。

³ 以下に非制限節ではないと判断した2例を示す。

(i) *þonne secge we þæt he wæs se mann [se ðe God
Then say we that he was the man who that God
spræc to gelomlice.]
spoke to frequently*

‘then we say that he was the man whom God frequently spoke to’

(79 ID cocathom1, ÆCHom_I_12_[Pref]:531.1.2324))

(ii) *Ðonne of ðæm þeodlande [þæm þe þær ymbsyndon] ða
Then from the countries which that there around-are the
folc þær cumende beoð,
people there coming are*

‘Then, from the countries that are around there, the people are coming there’

(coblick,JS_25_[MichaelMor[BiHom_17]]:209.225.2666)

(i) の例において、前置詞 *to* が関係節内に残置されている。Allen (1980), van Kemenade (1987) などによれば、古英語の関係節では指示詞の関係詞の移動によ

る前置詞残置は許されない。これが正しければ, *se* は関係節 CP 内で移動しておらず, 関係節内では空演算子が移動し, *se* は表層位置に基底生成されていることを示唆する。したがって, (i) は非制限節であるとは判定出来ないが, 以下で提案する (14) と同様の構造を持つと考えられ, Case Attraction が起こっていることが説明される。

一方, (ii) において括弧で括られている関係節は, YCOE のタグ付けに従うと, 主語が空所となっており, 指示詞の関係代名詞が与格となっているため, Case Attraction の例であると分類した。(ii) は本稿の観察に対する反例となるかもしれないが, 1例のみであるため, ここでの議論に大きな影響はない。

⁴ 上で述べたように, 中尾 (1972) や岩田 (2012) はコンマなどの句読法を制限・非制限節の区別に用いることに疑問を呈している。これが正しければ, 表2の14例が非制限節であることを確定することができない。一方, Frankis (2016) は訳者の直観によるところではあるが, (12c) を現代英語において非制限節に訳していることは注目すべきである。14例の中にはいくつかの非制限節が含まれていると思われるが, コンマの基準以外によりこれらの例を制限・非制限節に分類することは今後の研究課題とする。

⁵ 査読者より, 古英語期の *se þe* 関係節が (14) と (18) の二種類の構造を持つことを支持する独立の証拠が必要であるとの指摘を受けた。本稿の提案は, *se* が (14) のように先行詞と等位接続される場合と, (18) のように関係節内に生起する場合があるというもののだが, これは古英語期の *se* が示す曖昧性と関係があるように思われる。Mitchel (1985) や Hosaka (2010) などが指摘するように, *se* が関係演算子であるのか, 純粹な指示詞であるのか曖昧である (i) のような例が存在する。

(i) soðlice nu þu on innoðe geacnast. and sunu censt and his
Truly now you in womb conceive and son beget and his
naman hælend genemnest; **Se** byð mære and þæs hehstan
name savior name **who/he** is great and of the Highest
sunu genemned.

Son called

“Truly, you will become pregnant and give birth to a son, and you will name him
Jesus. He will be a great and will be called the Son of the Highest.

(Gospel, Luke 1. 31-32/Hosaka 2010: 66)

同様の曖昧性が *se þe* 関係節にも当てはまるとすれば, *se* が (14) では指示詞として, (18) では関係演算子として機能していると分析される可能性があり, *se þe* 関係節が二通りの構造を持つとする本稿の提案はそれほど不自然ではない。

参考文献

- Allen, Cynthia. 1980. *Topics in Diachronic English Syntax*, New York: Garland.
- Bianchi, Valentina. 1999. *Consequences of Antisymmetry: Headed Relative Clauses*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Borsley, Robert D. 1997. "Relative Clauses and the Theory of Phrase Structure," *Linguistic Inquiry* 28: 629-647.
- Browning, Marguerite. 1987. *Null Operator Constructions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1977. "On *Wh*-movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71-132, New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 2000. "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, Cambridge, MA: MIT Press.
- Frankis, John. 2016. *From Old English to Old Norse: a study of Old English texts translated into Old Norse with an edition of the English and Norse versions of Ælfric's De falsis diis*, Oxford: The Society for the Study of Medieval Languages and Literature.
- Hosaka, Michio. 2010. "The Rise of the Complementizer That in the History of English," *Language Change Variation from Old English to Late Modern English*, ed. by Merja Kyto, John Scahill and Harumi Tanabe, 59-78, Berlin: Peter Lang.
- 岩田良治 2012. 「古英語の限定関係節構文の統語形式再考」『天理大学学报』第63巻第1号, 49-64.
- Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Kemenade, Ans van. 1987. *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Dordrecht: Foris.
- Mitchell, Bruce. 1985. *Old English Syntax* vol. II. Oxford: Clarendon Press.
- 中尾俊夫 1972. 『英語史II』, 東京: 大修館書店.
- 大村光弘 1995. 「英語史における属格付与子の変遷について」『近代英語研究』第11号, 47-62.

- Sauerland, Uli. 2003. “Unpronounced Heads in Relative Clauses,” *The Interfaces: Deriving and Interpreting Omitted Structures*, ed. by Kerstin Schwabe and Susanne Winkler, 205–226, Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth C. 1992. “Syntax,” *Cambridge History of the English Language* vol.1, ed. by Richard Hogg, 168–286, Cambridge: Cambridge University Press.
- 宇賀治正朋 2000. 『英語史』, 東京: 開拓社.
- de Vries, Mark. 2006. “The Syntax of Appositive Relativization: On Specifying Coordination, False Free Relatives, and Promotion,” *Linguistic Inquiry* 37: 229–270.

コーパス

- Kroch, Anthony and Ann Taylor. 2000. *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), Philadelphia: University of Pennsylvania.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths. 2003. *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), York: University of York.

Synopsis

Case Assignmnet in *Se Þe* Relatives in Old English
Shuhei Uchida

This article aims to explain the Case Attraction phenomenon found in *se þe* relatives in Old English, which have both the demonstrative pronoun (*se*) which serves as a relative pronoun and the relative particle (*þe*). In this type of relative clause, the Case of the relative pronoun can correspond to the Case of its antecedent, ignoring the Case of the gap within the relative clause. This phenomenon is called Case Attraction.

From the data of historical corpora, it is revealed that the occurrence of Case Attraction is basically restricted to non-restrictive relatives. Partly following de Vries (2006), this article argues that non-restrictive relatives have a coordinated structure which involves the antecedent DP and the empty DP as coordinates, as illustrated in (1).

(1) [_{CoP} DP & [_{DP} Ø]][_{CP} *se*_i þe [_{TP} t_i]]

It is proposed that when Case Attraction occurs, the demonstrative pronoun (*se*) occupies not [_{spec},CP] but the coordinated DP position where the empty pronoun occurs in (1), and a null operator moves to [_{spec},CP], as shown in (2).

(2) [_{CoP} & [_{DP} *se*]][_{CP} Op_i þe [_{TP} t_i]]

Since the demonstrative pronoun is coordinated with the antecedent DP, the demonstrative pronoun receives the same Case as its antecedent. This article argues that because Old English has both (1) and (2) structures, Case Attraction occurs optionally.